



高輪だより

令和3年度 7月号
港区立高輪幼稚園
園長 柿沼 敦子

生き物との関わりの中で

園長 柿沼敦子

6月中旬、子どもたちが世話をしていたウサギのオセロが亡くなりました。年長すみれ組が、オセロの大好きだった餌や、庭の花、手紙などを添えてお別れをしました。動かなくなった世界にたった一匹のオセロに、愛らしい姿で私たちに幸せを与えてくれたことへの感謝を伝えました。オセロは子どもたちの心の中で生きています。

オセロとお別れをしたこの日の朝、年中うめ組の子どもたちは、アゲハチョウがサナギから羽化したことを喜んでいました。毎日毎日、サナギの様子を観察し、チョウになることを楽しみにしていたのでしょう。「サナギになって長い間眠っていたんだよ」と私に教えてくれた子がいました。「生きたお花からじゃないと蜜は飲めないから、外に出してあげなきゃ」と心配する子の言葉を受け、担任は、午後の晴れ間に、ケースの蓋を開けました。テラスから空に向かってひらひらと飛んでいくチョウの姿に歓声をあげ、「また、遊びにきてね」と学級全員で見送りました。

年少児は、見つけたアリのケースの中に入れ、宝物のように持ち歩きます。「アリのお母さんが、うちの子どこに行っちゃったのかしらと心配しているから、見つけた場所に戻そうか」と言うと、一旦は、はっとした表情を見せるも「だめ、だめ」と離さない年少らしい当然の姿があります。

また、別のある日、年長組でこんなことがありました。飼っているトカゲの尻尾が切れて出血し、びっくりした担任に、昨年年中で同じ経験をした子どもから「大丈夫だよ!切れてもまた新しいしっぽが生えてくるから..!」という言葉が発せられました。たくましい発言に直接体験の大切さを痛感しました。

日々の生活の中で、子どもたちは、小さな生き物や植物と直接的に関わりながら様々な場面に遭遇し、心を揺り動かされ、生命の不思議さや尊さを感じていきます。身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にす気持ちをもって関わるようになります。子どもたちがそうした自然との関わりの中で感動体験を積み重ねていけるように、園の自然環境のさらなる充実を図り、整えて参ります。

わくわく ぼかぼか
みんなえがおの
たかなわようちえん

オセロの祭壇で手を合わせる5歳児



羽化したチョウを見送る4歳児



オタマジャクシ掬いを楽しむ3歳児



今月の指導のねらい

<3歳児>

- ・自分のしたいことを見つけ、気に入った遊具や場で繰り返し遊ぶ。
- ・水や絵の具に触れて遊ぶことを楽しむ。(フィンガーペインティング、色水、水遊びなど)
- ・着替えや服の始末を自分なりにしようとする。(汚れたときや濡れたときの服の始末)

<4歳児>

- ・水や泥の感触を楽しみながら遊ぶ。
- ・自分のしたい遊びを見つけ何度も自分の興味をもったことを楽しんだり、気の合う友達と一緒に遊んだりする楽しさを味わう。
- ・育てている野菜や花に水やりをしながら興味をもち、実が大きくなる様子に興味をもったり収穫してみんなで食べることを喜んだりする。

<5歳児>

- ・自然物での遊びや水遊びをする中で、様々な感覚で感じたり、自分たちの興味の追求(観察や調べること試すこと)をしたりすることを楽しむ。
- ・学級の友達と一緒に目的に向かって取り組む充実感や達成する喜びを味わう。